# 海外新話

五

J-2218-5

# 海外新話巻之五

## 提督陳化成軍配付討死事

霜風知勁草板蕩識貞臣とりや天下兼平無事の時に當て其弊に紊し庸夫位を得姦人權を握り忠臣義士ハ却て草莽の間に蟄伏し其戈力を尽すこと能ハず爰に提督陳化成ハ道光十九年英夷の変乱起るに依て新に卒伍の中より撰び挙らせ福建の水師督に命ぜられ屢軍功あり翌二十年江南の守に補任せらる茲に周て日夜軍務に力を竭し士卒と共に甘苦を同うし支を處するに紀律あり同年四月定海城陥ると聞き急ぎ吳淞口に至り新に八千

斤の大筒六十挺を鋳立て是を分けて東西の基場に備へ
東は以て敵の上陸を防ぎ西は以て敵の大船を撃砕の用意
をなし其余城壘を築き刀槍を磨き兵粮を畜へ軍民を
按撫せり士卒等其徳を仰ぎざるはなし英夷も又化成の
勇名を聞て不怕江南百万兵唯恐一人陳化成とは云ふへ
り同二十二年の春逆夷の兵乍浦を始め近海の諸城を攻
取り其勢ひ破竹の如くなるにより化成は逆夷の不日に攻
寄べきを察し士卒に下知して益防禦を厳にせしむ果して
五月七日敵船来り侵すこと甚急なり此時味方寡勢にして
援兵も至らず支の遂に就難を計り化成即ち士卒に向ひ

大義を挙て諭しけるは此度の合戦に於て我力を極め死
を致して國の鴻恩に報んとて汝等幸に我を助け忠節
を全せよ士卒等これを聞て大に感激し一人として涙地に
濺がざるは無し且人毎に一丸の業を與へて同戦ひに際の附
各これを口に含まば其膽氣を強怯にまべしと士卒等おまた
得て喜ぶを限りなし翌八日子の刻計りに大小の軍船一時
に押寄する陳化成士卒に先ぶち西なる臺場に馳登り
新に鑄させ置たる大筒に強業込め大船に向けて打放つ
此時敵方よりも同く打懸されば其玉化成の備へる塘の前
に碎落て味方の兵卒微く畏るゝ氣色あるにより化成

就て下知しけるハ敵船の狭間に向烟起るハ虚發なり必ず驚くを莫れ黒烟起ハ実發なり各全身地に俯し越至にせよと士卒等心得さりとて形の如くなしなるに依て死傷を負更になし化成別に一計を設け敵船を誘き進めんとの態と墓場を下りて墨の蔭に伏せ敵ハ機を得て大船陸續として攻来る化成此時を失ふべからずと再び士卒を率ひ墓場に登り数十挺の大筒一度に打懸大小の船十余艘を打碎き黒白の夷二千余人を焼殺す時に東の墓場よりも連綿と発砲し敵の上陸を禦ぎ居れども今ハ士卒等夷船の檣の上より筒先下りに打懸る石火矢に撃倒され殘り少なになり

なれば化成これ見て一隊の兵を分ち遣て防がしめん
とせし所に敵千余人既に上陸し西の臺場に向て押寄る
其時誰なるや士卒一人化成の危急を援んと一匹の馬を
引く化成の傍に至りこれに騎て暫く此地を逃れ玉へと告
るに化成告て曰我は死を以て國恩に報んとす何の面目
あれば我人とのに背を見せ此處を引退くべきと言もたて
ざるに一箇の天砲鳴渡りて化成の傍に落るがその火
氣激發して化成の全身を糜爛せり然れども化成拉塘の
上に立て魏然として動かず殘れる士卒に下知して曰今は
一人も多く敵を殺し快く討死すべしと斯る時東の岸

より上陸する夷人數百人釼付筒を排並べ化成を目懸て迫り来る其放り玉は雨の降がごとく其釼の光恰も霜の敷に異ならず化成今は左右に敵を引受加るに火毒心腹に透り如何とも防戦すべきの力なく今我最期と思ひけん恰もじ都城北京の方に向ひ再拝頓首して死しぬ士卒數十人同枕に討死せり爰に武進士劉國標なる者あり陳化成の屍を以て敵の手に渡すまじと路の傍なる芦葦生茂れる中に藏し置其身は一方を切ぬけて去り後十二日を経て國標再其地に至り化成の屍を負出せしに其面色猶生る時の如し即ち嘉定縣の城外に殮葬す上王公より下庶人に至る也

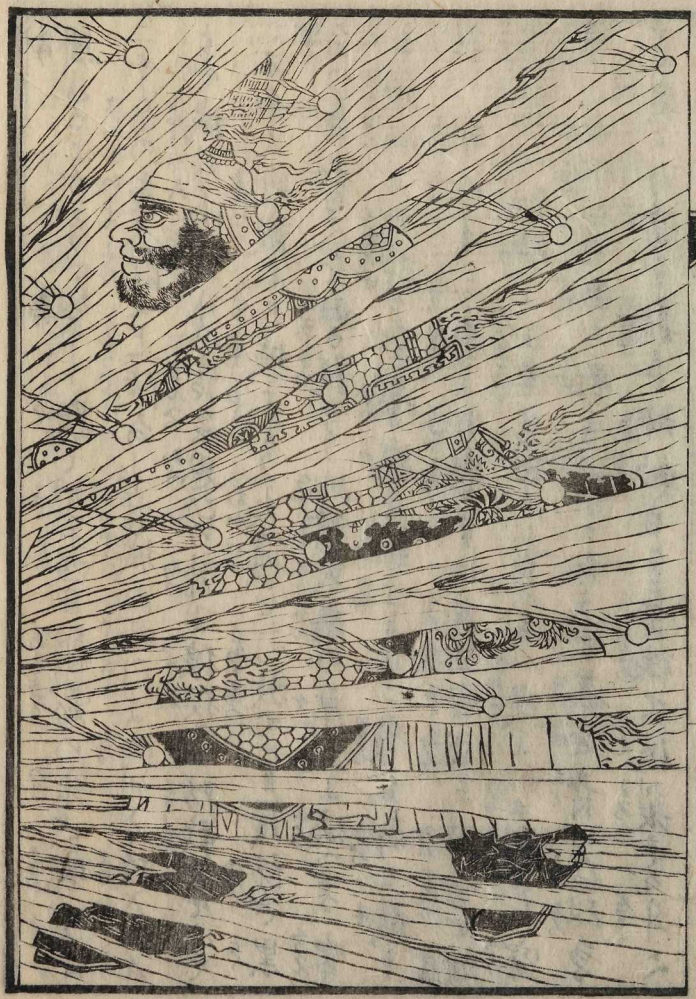
化成の戰死を閲て涙を流さゞるはなく柩の過る處戸毎に香火を供し、とぞ路上に祭る江蘇の巡撫程矞采その忠節を慕ひ官亭に於て文武の屬官を率ひ祭ぬ役く時に皆痛哭声を失ふと云此事叡聞に達せしかば帝悲感淺からず為に朝夕の進膳をも減し數日衣の袖ぬ湿し給ひ命じて其專祠を建立ありしとなり

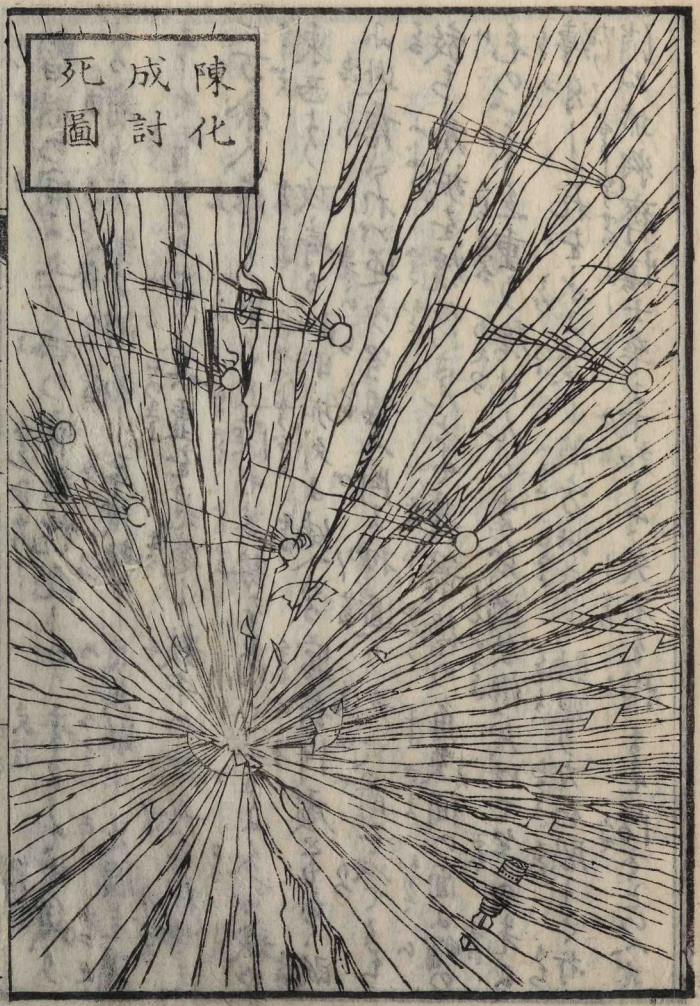
## 鎮江府落城事

鎮江府は揚子江頭の一大都會にして殊に清國喉の重地なり若とぞ奪るとぞは敵に在ては四方乱入の便り ぬ得味方は南北諸州の通路ぬ隔絶せらる中國の大患是

に過ぎるなし故に皇帝文武の百官を集め朝議あつて
緒州の軍会を召募り鎮江に向はしめ府城の内外を限ず
寸地の見えぢる程に陣営を布列せしむ旌旗返翻として
山の嵐に吹靡き砲臺層重として江水に臨ミいと厳重
に備へられば縦令西洋十二ヶ国の同盟一時に兵を押寄る
とも容易に攻落すべしとは見えざりける去程に六月十
三日午の刻斗りに蒸気船十艘上に白烟を吹て馳来る
と見えしが頭て大軍船八十艘引續き逆巻浪に押寄遥
に府城に向て幇を入れ船陣をぞ布にけるこれを望むに鋭
眼累々として蜂窩を集めたるが如く帆綃の影は蛛の絲を

掛るよりまご繁し斯て翌十四日朝霧の未ご霽ざるに
二千余の夷人既に上陸なし府城の西門に向ひて攻入らん
とす城外に備へる官兵恩ひの外に狼狽し防戦せずして
二万余人逃散ぬ只城上より大筒を打放てこれ防ぎ黒
白の夷五百人を撃殺せり此時東南の岸上に備へる官
兵敵船を打砕かんと臺場に馳上りる處を却て数十
艘の敵船より一齊に打懸ましに其玉官軍の陣営を焼
臺場を粉砕し士卒等百人二百人も一度に撃倒され空
中に血烟起て物の影もさざかならず其玉青の猛烈なる
こと実に百雷を欺き坤軸もこれに依て破裂する斗之




陳化成討死圖

暫時の間に五万余の官兵燒死したり幸にして生殘り
たる者も其勢に僻易し耳我聾し目我眩し足腰立得
ずして有るが夷人其虚を見透し數千の端舟を投命し
二万余人飛より早く上陸せ其勢をもつて二手に分ち城の
東西より攻寄る此時城外に繞へたる官兵何處ともなく既
に逃落されば逆夷勢恐に國に押逼り先火箭を以てうち
放ち府城を燒落さんとせ其箭櫓の角狹間の面に蝟の
毛のごとく立重り燃付んとする我満兵綿我以て竿の先に
縛付しこれを水に浸し彼方此方と馳廻り力を服して打
消ぬ城將齊慎士卒に下知して矢石を惜まず防ぐといへた

敵追ひに迫り皮掛子紙打掛け城中に乗入らんとす
此騒乱に乗し敵又城後の北固山に大筒数十挺運上り
此處より城樓に向ひて打懸る甚玉集り落て石正門を
燒砕く甚處より敵直に付入せんとする紙齊慎海齡相
共に満会の強壯なるもの五百人を率ひ石正門の傍なる鼓樓
岡に上り鉄砲を連發して付入敵を打まくめんとす然れ
ども敵又山上より陸續發砲し防守に力なし既に黒白の
夷人城下に蟻の如く付き我先に乗入んとす此時北門
の敵十字の旗印を押立て兎一に乗込と見えしが驍騎祥
雲爰を大事と士卒に下知して短兵急に打て懸り五百余

人を打殺せり然れども白戎を殪せば黒戎進み黒戎を殺せば白戎援ふ加るに南門の敵大筒を以て城門を撃碎し其處より潮の湧がごとく乱れ入り城中までに色めき立てまたや落んと見えられば城将齊慎今は身に深手を負て流る血を押拭ひ天を仰ぎて痛哭し既に自尽しく最後を遂んとする所に士卒一人馳至り諫て曰呉今将軍は一人自殺ありしとて此大敵退くきゆもあらず況や将軍の母堂八十の齢を過させなひ日々辛きことを聞なふらん忠孝両ながら全しがたれば古よりの習なれば一先此地を敵に紛れ逃落なへべし兎角再挙に敵を殲にするの計策とて

専一のことなれと言も肯ざるに齊慎を脇狹と擾乱の中に紛れ丹陽縣に至り古廟の内に臥しめて醫藥をそらなる斯て城中は四面より攻入敵を相手取り満兵等今我が死と血戰を中にも都統海齡は手に刀を把り金剛夜叉の荒るごとく當る我幸切て廻り黒白の我二十人我討取さう驍騎祥雲も亦敵の手に死する我恐れ溝水に身を投じて死しぬ僅に生殘りたる満兵等百余人諸將の最期我ことに我もくと城中に討死をぞ遂にける実に哀れなる事共なり斯て英兵は一戰に揚子江頭の重地を攻取されば喜び勇で勝関揚且又清兵の返し軍あるべしと其用意我なし

十三門外并に府学東門の邊に於て夥く地雷火を埋伏し船中に載せ来る所の石火矢をもつて城上に配り彼へ清軍攻寄るバ一戦に蹙碎んと欲するの気勢なり後數日あつて逆将噗嘯喳北固山に上り味方兵卒の死傷を点撿するに一千八百二人を損すといふ因て鎮江府近郷の百姓を捕へ来り其不足の數を補ひ陣営を布列せり西は甘露寺より東は金山寺の邊に至るまで黒白の夷人碁石を散せるごとく充満して何退くべしとも見えざりける

都統海齢妻投身火中事

海齢は府城の南門に在て将軍齊慎とともに士卒を率て

攻入敵を防ぎ居けるが北門の矢倉に火のみ揚りたるを見て
引廻し士卒に令して打消んとするに其火勢益猛烈にし
て近寄べき様なし此時海齢已が館の前を打過ぎ風と
妻子の事ども心に懸り館の中へ立入たるに妻は三歳に
なりし乳兒を膝に抱き更に恐怖する氣色もなく閨
窓の下に坐し筆硯を取出し何ゆゑん物認め居たる
有様なりとも我見て海齢は直に近寄り兄なる一子坐
にあらざれば是は何處へ去りしぞと問に妻答へて先刻
丹徒縣へ落行武者の脊に負せ子細の事書したる
文持せ親縁の家に託し遣れり必案じ給へなといひ

ひまだ海齢又諭して曰今日官軍の勝利覚束なし既に
逆夷等城下に迫り北門の矢倉焼延て支危急に及び
ぬれば汝も此處を一先立出て何處へなりとも綱に隠れ
敵に紛れて逃落ここに死生は天なり若命あらんとれば
再度對面すべし別れ情まだ早く打立べしと促しける
に妻は両眼に涙を浮べ如何なれば墓なることを告ぬに斯る
大節の場に臨て君猶妻子の事ども心に懸ぬや妾が身
今此館を出去れば夷人どもに捕へられ如何なる汚辱を受ん
ことも計り難し結句城中に於て自ら死するこそ本意なれ
且又二人の子兄なる方は既に縁者の許に託しこれば生

長の上は必ず帝の御用にも立家の相續疑ひなし次
なる此児は妻の心に任せる人余りとして無情となるべし君は
士卒へ御下知あれと一日片時も此城を固く御守り必ず
敵の手に渡しなんと涙に暮て申されば是聞て海
齢我妻ながら義烈の心に感激し左あらば敵と血戰せんと
館より外に出んとしたる我妻は鎧の袖を引止め暫時は
待あれと妻の最期を御覧あり心を後に残しなんと
三歳の乳児を小脇に抱込み甲斐々くも北門に向て馳
去と見えしが怜れ猛火の中に飛入て丈の先途をなしに
なり海齢はとれ我見て益感激し憎き逆者ども哉今は國

家の敵のミなうむ我妻子の仇なれバ一人も多く討死て瞑土の土産に語らんと生残りたる満兵四五十人一身となし群がる敵に衝入て右往左往に切倒し今を必死と戦闘す暫時に敵三百余人を打取たり斯て敵ハ此勢に僻易し四方に颯と靡けるとき海齢思案していや逆夷の身にかゝらぬうち速に最後を遂んと一方を切ぬけ北門の矢倉焼落て火勢未だ吹減せざる中に投ゞ夫妻同し處に焼死したり程なく叡聞に達せしかバ両江の総督奕山に詔あり丹徒縣に残れる海齢の一子に厚祿を賜ひ夫妻の忠節を以て處々の門閭に旌表ありなれバ古今未曾の事ぞもなると見者感涙を洒がぢるハ

無かりけれ

欽差諸大臣奏和議事

逆夷圖山関を破り鎮江を陥れ其勢益盛にして不日南京の省城に押寄せんと数百艘の大軍舩瓜洲京口の邊に相集りて碇泊せと我関て揚州江寧ハ勿論江西安徽河北等の居民その騒動大方ならず依て欽差大臣耆英乍浦副都統伊里布両江総督牛鑑江蘇巡撫程矞采相共に會議なして曰我等皇帝の大命を奉して逆夷退治の為此地にあり日夜心を軍務に配り防禦の術を施せといへども一も其効功なくして退く干要の城地をのりて敵に奪

清英兩將定和約圖

取れ人民日として枕を高うすること得ず縦令今一度力を極めて血戦すとい人ども官軍敗走するに於ては却ひて夷人侵犯の勢を長し國家の害を益んのミ進戦を避て畏怯するに似たりとい人ども不如皇帝に奏聞して一先逆夷の請所に任せ和議を取結び万民の命を拯いんと諸大臣即ち奏して同情等身に大任を受邊疆の塵を清むること能はず空しく逆夷の兵勢を長し國体を損傷するの罪今に於ては免るゝことを得ず然れども此危急に當り空しく死せんより各卑見を以て陛下に布陣し而る後身を斧鉞に委せんのミ謹で夷人侵犯の情由を察するに下三ケ條の外に出でず第一ハ鴉片烟

の次金共に船軍に用ゆる所の費金合せて二千一百万両これを
受て後和睦を結び兵船を退去せんことを欲するなり第二香港
厦門寧波上海定海等の地に商館を設け衆夷永く爰に
據て万国と諸物を交易し其大利を攫取せんことを欲するなり
第三は英国通船の商長中国の官人と相共に出會する時に
於て彼是平等の礼を行ひ聊尊卑高低なからんことを欲する
なり彼が懇望する所の事件如此なれバ時の權宜によりて且く
其請所に從ひ事々酬酢あらしく許容ありなバ海疆静謐に
歸すること疑ひなし若や唯に中華の威武を以て彼を討伐
せんと欲るときは庶民甚荼毒を免るゝの期なし既に昨日何者

声言なしとかはん壽春縣の勇兵を募り近日英夷と戰鬪あるへれよし夷人等これ聞て即刻鍾山の頂に大筒數十挺運び上りこれ以て省城を撃破らんとす猶又船上に紅旗を推建銃眼を開き合戰を挑むの勢あり揚州の居民等固より柔惰の風習なれバこれを見て老少男女の分ちなく省城の門外に相集て曰我等如何なる不幸にして斯る時節に出逢しとて今に合戰初りなバ逆夷の放てる大砲の為に一身微塵となりて輕碎なるとの悲さに願くハ欽差大臣此艱苦を拯ひ給へとて諸氏泣さけバ声暫も休となし此光景実に心膽を寒まるに堪えたり斯る時に當て無連り禍結んで無辜の生靈を殘害せんより

且く逆夷の請所に任せ權宜をもつて和交を結び通商を差許さる猶又廣東十三家の欠金并に彼が船軍の費金合せて二千一百万両返還なしもつて実に生民の大幸なり

臣等職を失ひ國体を損するの罪敢て是を辞せず各重刑に従つて其罰を受んと伏て乞と今日に至て欽差の大臣防禦の術を施すに力なく遂に和議の一條を以て怒り我堪へ恥我恐び皇帝の前に奏進す其心中苦心の程とて実に察やらるゝなり

両軍和睦事付和約條目

諸臣和議の奏聞を一覧あつて帝深く逆鱗なしなへと

いへども孫武子の所謂五支七計を以て彼我の形情を篤と
經校なしおのに如何せん今日の時勢中華の勝算殊に多
かつぎ況や將士奔命に疲弊するの余に當り強て戰鬪を求
むるとも必勝の利なくして却て中華の武威を損し天下万國
の咲ひ我取んのみ然れば諸將の奏議に任せ時の權宜を以
て和睦を差許し生民塗炭の苦我免れしめんより外なしと
數行の悲涙を濺ぎ給ひ即詔あり曰廣州福州厦門寧波
上海右五ヶ處に商館を設け諸物交易を許すべしとの人ども
夷人妻子を携來て爰に常住するを我捺ずべし定海の舟
山厦門の古浪嶼右二ヶ處内地に連屬せざる我あり且く

居住我許容すべし猶又英夷請求する所の欠金及び彼が
船軍に用る所の費金其高の莫大なる我ものにて噗嘯喳と
同く會議の上とれ我年分となし尤其息を加へて償還す
べし諸事熟考の後取計ひ去年廣東府に於て琦善揚
芳等漫りに逆將の気勢に畏懼し毎事彼が請に任せ苟
且局を了るが如きをあるべからず諸將江寧にあつて此詔を受
即日夷船に至り英將に出會し和議を定む其目左の如し

茲因

大清

大皇帝　大英　君主欲以近來不和之端解釋

息止肇衅爲此議定設立永久和約是以

大清

大皇帝欽命

欽差便宜行文大臣 太子少保鎮守廣東廣州將軍宗室耆英頂戴花翎前各督部堂乍浦副都統伊里布

大英伊耳蘭等國 君主特沙欽奉全權公使大臣英國所屬河度等處三等將軍世襲男噗鼎查

公同各將所奉之

上諭便宜行文及 勅諭全權之命互相校閱俱屬善當即便議擬各條陳列於左

一 嗣後

大清
大皇帝　大英　君主永存和平所屬英華人民
彼此友睦各住他國者必受該國保祐身家全
安
一自今以後
大皇帝恩准　大英國人民帶同所屬家眷寄居
大清沿海之廣州福州厦門寧波上海等五處港口
貿易通商無礙且　大英　君主派設領事
副領事等官住該五處城邑專理商貿事宜與
各該地方官公文往來令英人按照下條開叙

之例清楚交納貨稅鈔餉等費

一因大英商船遠路跋涉津洋往々有損壞須修補者自應給干沿海一處以便修船及存守所用物料今

大皇帝准以洋銀六百万元償補原價

一凡大英國民全粵貿易向例會館額設行商亦稱公行者兼辨今

大皇帝准以嗣後不必仍照向例乃凡英商等赴各該口貿易者無論與何商交易均聽其便且向例額設行商者內有累欠英商甚多無措清完

者令酌定洋銀三百万元作商欠之数准明由
中國官為償還
一因
大清
欽命大臣向大英官民人等不公强辦致須撥
軍士討求紳理令酌定水陸軍費洋銀一千二百
万元
大皇帝准為償補惟是道光二十二年六月十五日
以後英國因贖各城收過洋銀之数
大英全權公使大臣為可按数扣除

一以上三條約定銀數共二千一百万元應如何
分期交清開列于左此時交銀六百万元癸卯
年六月交銀三百万元十二月間交銀三百万
元共六百万元
甲辰年六月交銀二百五十万元十二月間交
銀二百五十万元共五百万元
乙巳年六月間交銀二百万元十二月間交銀
二百万元共四百万元
自壬寅年至乙巳年止共交銀二千一百万元
倘有按期未能交足之數則酌定每年每百元

加息五元

一凡係大英國人無論本國屬國軍民等今在中國所管轄各地方被禁者

大清

大皇帝准即釋放

一凡係中國人前在英人所據之邑居住者或與英人有來往者或有跟隨及伺候英國官人者均由

大皇帝俯降

御旨謄録天下

恩准全然免罪且凡係中國人為英國支被拏監禁受難者亦加

恩釋放

一前第二條內言明關係英國商民居住通商之廣州等五處應納出口進口貨稅餉費均宜秉公議定則例由部須發曉示以便英國按例交納今又議定英國貨物自在某港按例納稅後即由中國商人廣運天下而路所經過稅關不得加重稅例只可按作價則例若干每兩加稅不過其分

一議定英國住中國之揔管大員與
大清大臣無論京内京外者文書往來用照會字様
英國屬員用陳字様大臣批復用札行字様両
國屬員往來必書為平行照會若両國商賈上
達官憲不在議内仍用稟明字様為善
一俟奉
大清
大皇帝允准和約各條施行並以此時准交六百万
元交清　大英水陸軍士即退出江寧京口
等處江南並不再攔阻中國各省商賈貿易至

鎮海之招宝山亦為退讓惟有定海縣之舟山島厦門廳之古浪嶼山島仍歸英國暫為駐守迨及所議洋銀全數交清而前議各海口均已開関係英人通商後即將二處軍士退出不復占據以上各條均関議和要約應俟大臣等分別奏明

大清

大皇帝　大英　君主各用

朱親筆批准後即速行相交係兩國分執一冊以照信守惟兩國相離遥遠不得一旦而到是以另繕

二冊先由

大清便宜行事大臣等　英國欽奉全權公使大臣各為　君主定事蓋用関防印信各執一冊為據係即日按照和約開載之條施行妥辦無礙兵要定和約者

道光二十二年七月廿四日即英國紀年之一千八百四十二年八月廿八日

英國全權噗啸喳

印

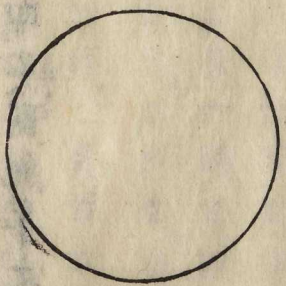
大清欽差大臣

関

便宜行叓耆英

防

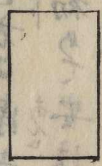




兩江總督部堂牛鑑　関防

江蘇巡撫部院程矞采　関防

乍浦副都統紅帶子伊里布　関防



右の條目に依て愈両國の和睦取調ひ二千一百万元の金子約定の如く先六百万元を以て英將噗鼎査に差渡す噗鼎査は其金を受て即日江寧を退船すとれ成ひて鎮江

京口瓜州等に碇泊する所の諸軍船追々揚子江を去て本國英吉利に立還るもあり又は印度の地方に帰帆するもあり此時に當りて璞鼎査は暫く廣東の地に至り向後通商交易の事件を取定め郭士立（士立は英國の産にして幼年より清國天津の地に來り文筆を学ぶ正二十余年然る後まで英國に帰ると云）は定海に留りて通商の事を管領せり斯て濱海の人民連年の騷乱を避て四方に離散し道路に悼哭する者多かりけるが今日に至り初めて安堵の思ひをなし各故土に立帰り壊屋を脩め荒園を掃ひ即ち産業に就て太平万歳を唱ふ且又朝廷に在ては諸将士の功勲を褒賞し有罪を誅罰せらるゝ茲に於て士気

大に振作し沿海の武備最嚴整なり扨英夷の外患
あるに依り如此清國二百年來兼平柔惰の風習を一變
せしハ却て國家長久の基本とも謂つべき歟

海外新話巻之五大尾